

永瀬清子

美



あけがたにくる人よ

あけがたにくる人よ 永瀬清子 思軒社



あけがたにくる人よ

著者 * 永瀬清子

発行者 * 小田久郎

発行所 * 株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話(二六七)八一四一(代) 振替東京八一八二二

印刷所 * 相良整版・福田印刷

製本所 * 岩佐製本

発行日 * 一九八七年六月一日初版第一刷 一九八七年十二月一日第三刷

定価 * 一六〇〇円 ISBN4-7837-0221-7 C0092¥1600E

あけがたにくる人よ

永瀬清子

思潮社

目次

序詩

第一章 あげがたにくる人よ

あげがたにくる人よ 10

古い狐のうた 14

小さい水車のように 18

その家を好きだった 20

老いたるわが鬼女 28

黙っている人よ 藍色の霧よ 32

若さ かなしさ 36

紫バンジー 40

お茶の水 44

昔話 48

私と時計 54

ピーター 58

昔の家 62

老いるとはロマンチックなことなのか 66

苔について 68

縄文のもみじ 74

第二章 女の戦い

唇の釘 80

八月の願い 84

夜ふけて風呂に 86

雨雲ふかく 90

古事記 92

私が豆の煮方を 96

毛の房のなか 100

私がいなければ何もない

102

指 104

女の戦い 108

あとがき 122

序詞

水たまりに

風たてばひかりしたたり

風去ればおもむろに

うつるは にがきわがかけ

第一章 あげがたにくる人よ

あけがたにくる人よ

あけがたにくる人よ

ててっぼっぼうの声のする方から

私の所へしずかにしずかにくる人よ

一生の山坂は蒼くたとえようもなくきびしく

私はいま老いてしまつて

ほかの年よりと同じに

若かった日のことを千万遍恋うている

その時私は家出しようとして

小さなバスケット一つをさげて

足は宙にふるえていた

どこへいくとも自分でわからず

恋している自分の心だけがたよりで

若さ、それは苦しさだった

その時あなたが来てくれればよかったのに

その時あなたは来てくれなかった

どんなに待っているか

道べりの柳の木に云えばよかったのか

吹く風の小さな渦に頼めばよかったのか

あなたの耳はあまりに遠く

茜色の向うで汽車が汽笛をあげるように

通りすぎていってしまった

もう過ぎてしまった

いま来てもつぐなえぬ

一生は過ぎてしまったのに

あけがたにくる人よ

ててっほっほうの声のする方から

私の方へしずかにしずかにくる人よ

足音もなくて何しにくる人よ

涙流させにだけくる人よ

古い狐のうた

おおあのととき私はどんなに見えた？

風のすきとおったあの笹っ原で

遊ぶ小狐のようにもあどけなく見えた？

それとも光っているポプラのように

絶え間なく金の切口をばらまいていた？

私はだんだん変わったのですよ

いまの私は毛の切れた古い狐ですよ

世の中の霜をあびて

私はどんだん葉を落したのでですよ